

充実を図り、組合員の営農コストの低減と所得向上を図ることが求められています。しかもこうした合併は、JA に体力のあるうちでないと組合員の高齢化による脱退の影響も大きくなりますし、組合員自身の意識減退への歯止めにもなりません。

また、仮に合併が成立しない場合においても、JA の生き残りのためには一刻の猶予も許されない状況に変わりはありません。そのため JA 側は、財務指標の増強および改革のビジョンについて理事会で徹底した議論を行い、組合員に理解されるまで根気よく説明会を開催する必要があります。そして、提示された改革ビジョンに基づいて活発な議論を交わすことで透明性をもった改革への協力をお願いするしかありません。

(広島県世羅郡・世羅幸水農園前代表)

農作業体験学習に期待するもの

宮田 喜代志

昨春、子育ての活動支援で40人ばかりの大人・子どもに笥掘りを指導するという機会があった。ほとんど初めてで穴掘りすら大変なのに、地下茎の切断となると皆目見当がつかないという子ばかりであった。私が、そこそこに掘った地面めがけて一突き入ると、ぼっこりと笥が跳ね上がりごろんと横になった。それを見ては、「魔法みたい」と子どもたちが喚声をあげていた。知的障害者の授産施設と合同で行ったこの行事には、大人たちもたくさん参加していたが、驚くことに経験者はほんのわずかに過ぎなかった。

高度経済成長後、私たちの社会は、目覚ましい進歩を遂げたといわれている。その一方で、物質的な豊かさと引きかえに自然環境の

破壊が進み、大地とのじかの接触ができなくなっている。農産物の生産現場を経験するなどという機会は、「普通の」子ども達には全くないといってよい。

こうした自然(農業)からの乖離・隔離を問題にした議論はさかんに行われているようだが、土や泥との交わりは本当に疎まれているのであろうか。と言うのは、子どもたち、とりわけ幼児たちの生活の中では、実はそれらが最も尊敬の対象であることが容易に分かるからである。最近流行りの泥ダンゴを丁寧に磨き上げている真剣な眼差しを見れば、なるほど思っていただけであろう。

2002年4月より、文部科学省では「総合的な学習の時間」をもっと取り入れるという。この中で自然教育が位置づけられる以前から、たくさんの小学校や幼稚園・保育所で農作業体験がカリキュラムに取り入れられ、それなりに効果が認められたようである。しかし、それらの多くは単発のイベントであることが多く、結局農業の本質に迫ることなく終わっているように思われる。

子どもの成長発達是一本筋で決まるものではない。それは、連続的かつ重層的な経験の中で形作られるものであり、環境との有機的な結合なしには捉えられない。私は、さかんに行われている農作業体験が、農作業を通じて発達を促すことを目論んでいながら、その実農業とは何であるかということについて非常に理解が浅いのではないかという疑念を持っている。

農作業を取り入れた学習プログラムを作るのであれば、農作業を一連の作業体系から切り離していいものであろうか。また、現実地域で行われている生産活動との比較や、歴史・風土・地域社会とのつながりを具体的に認識できるような組み立てにすべきではないだろうか。

実に欲張りなことを言ってきたが、私は残念ながら日本の教育の現状は、「着せ替え人形」

のようなものでどの分野も上っ面を滑っているに過ぎない、と思っている。農作業体験の目的は、疑似的ではあっても単なる知識教育ではおさまらない労働体験であって、最終的には自然認識を通して科学的認識力を培うことであるといえる。むしろ、教科書そっちのけでもじっくりと時間をかけてしかるべきものである。これらの自然認識と科学的認識能力は、ひいては自己概念の形成を支えるもので、自我形成の最も重要な要素となるからである。

そればかりではない。これらの能力が共同作業という形式の中で養われるとすれば、それはあくまでも他者抜きには考えられない性質のものとなる。それが将来的には社会への適応力につながってゆくことも容易に想像できるであろう。つまり、農作業を通じて体得するものは、自然や環境との接触による第一義的な認識だけではなく、集団や社会の意味付けにつながる認識能力であるということである。

農作業体験が、人はひとりでは生きてゆけないものという自明の理を具体的に初めて認識するきっかけとなり、個性的な自己主張も

一定のモラルやルールによって支えられていることや、共同の目的というものはお互いが尊重し合わなければ達成されないということを経験して初めて体験する場となることを期待したい。こうした経験が、いたわりや慈しみの心の体得へと発展して行くことができれば、その子にとって豊かな人生を準備するものとなるであろうから。

新しい教育システムが、先を急ぐあまりお仕着せの総合学習に走るのではなく、ゆっくりと豊かに作り上げられていくことを願ってやまないが、以上述べた通り、その中での農業・農村・生産者の果たす役割はたいへん大きいと考えている。

今年も、筍が地面を突き上げ始める季節となってきたが、我々大人たちが重い腰をあげて、鍬を研ぎなおす準備をしなければならぬ時機が、どうやらやってきたようである。

(熊本県熊本市・リハビリ介護研究所)

注・詳しい経験報告は、社団法人農協共済総合研究所発行の「共済総研レポート」(2002年2月号)に掲載した拙稿「農業(自然)の認識と幼児の発達支援」を参照ください。